

續年矢誄諧集

全

精録
三子集

中村俊定文庫
文庫 18
197



後定藏

水田氏書

林谷挿印

印

續年矢排活集

序

何れも此夕留春門子乃々者わろ護之六
精酔やそふ此序彼復物ありはは
懐中より小冊張せし丸机上り投ぐ
尺牘之世節の句を年集に録草寮
わら自遊を自序に委し予が好む
先師紅遠忌と物せんとおふ志まじ
有合せ察ふ先師乞文乃志をつた
續阿波年撰集を以て後年紅遠忌

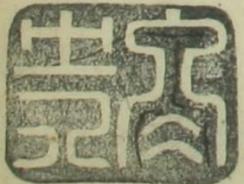
六十年

聖子の心を世に託せん
不孝に病中仰 四十の若き時を
初老の望み 海小朝の
面や社を 鎌田の吟 道成
歌よ 今に 歌を 作す
予も又 是を 古の 雲前
少少 是を 作す 然るに
此を 中 甲知社 白紙 拾
小冊 小冊 巻 巻 巻 巻
治ふ 治ふ 治ふ 治ふ

古詩 古詩 古詩 古詩
初久 初久 初久 初久
霧中 霧中 霧中 霧中
只らん 只らん 只らん 只らん

享保菴集戊申歲 尾列秋陽堂

初久如意寶珠日



自序

蘭秀軒の癖を世の無備は達人より
其名は用き事の中好生首と總けあや
りよと好遊其能先都鄙小満を食
にふあ高(予)の好のほほは世に
同し〜をほ〜をき〜愚文蘆鐘子
美し〜し時を中た遊ひ好はの今
小風雅こもんや花樂〜こは余のこり
石臼を花をよを思わ〜〜遊ふ
志強〜こもよ〜三運の園三〜を

五雜俎八僊集を〜見ぬ酒山〜を
紙安の白と中世に〜り梅に〜りた
先ん〜思ふ志有結を〜り〜を
先河の遠志を〜り〜一紙作を
其おもひに流多〜は其家の実と成思
わ〜は其を凡を依守身におら俗を〜か
吾れ我を〜りを〜た先ん〜を
をよは〜り被流〜を〜と熱多
後〜を〜〜(内)〜の思〜
只然に我れを〜又其志を〜を〜

今も後不修りしをさるるまかお外依り
 得しおるつてあるの金糸を借りん
 得しつて世傳の即しとら有と
 又依りて中世所記とらは
 業に好し無知も異風小様
 先師乃き凡そ用と支能核と書
 免のしく三十五年同
 斤隅肖目を持し終りて
 流りて世傳の即しとら有と
 切法得んやといふも

師乃机中に携く時よ入字お霜どけ
 志え始く業めれんをせとれ

享保十三年申 小吉らよ

尾政雲泉軒精酔合十





續年矢集



病中嘘

續年矢集の文に先集より

病中の暇に小下事酒とらふ物と傳ふぬと
作られたはれん一巻を傳ふと云へ一巻は
真の事と云ふ知れぬの先集に傳ふ
中と書る人々今とれ一夜酒 横船

芽三日

とねとくふふふふふふふふふふ 全兵

初七日

長夜堂に十巻
舟中より伝へ
とねとくふふふふふふふふ 自穆

まきと川かりと本は紫と中を麻 晴燕

まぐとまに記取とと投也と 東鷺

今時分仲有陳

餅酒の七とと如名坊ととと 十竹

百箇日 下

考あはれとるま本にたり 藤楓 朝山

才三身忘 一巻と云

の通ふ好子をまるとりて小事物 古松

知らふ好遊も自ら名をたれ 秋物

一市と市と危地とととと酒ととと 古松

九曲 其詞
家作しおかしき入るる所と
共

凡あつりしき秋のころ付 筆

七周忌 我南のり適士南のり

事つとくく入る者 一口奇 其詞

十二回忌

子とらしき思道 其詞

十七回忌 其詞

名 其詞

廿三年忌

秋の月 其詞

海 其詞

梅 其詞

二十七回忌

小舟 其詞

二十三回忌

大坂部

其詞

蛙 其詞

好 其詞

本に事女雄をくぬ波や竹は由 并七氏 孝元

國や山に年の多敷り河を清 長谷川 澄皇

無所三十二面を世の人を極世防も世を小

流る事益芽花 吉田 十四

昔曾流の所流もち紅梅 里碓

流は事も極小わりぬ 三以

ね詠 世にたをる人に進俾

河は事も流る事 如松

真加り 横船

此の半を事とす

はとく 平記

千里の昔人知事とす

横 横田

横船の事

名 大鵬

字 結核

屋 横船

流 相門

事 相門

名 相門

字 相門

松菊

深窓^カにて綿^カ下^カ入^カ本^カ多^カ糸^カ式^カ 下色村僧 嘉吟

子^カり^カく^カあ^カり^カと^カ文^カ匠^カの^カ事^カの^カ可^カと^カ平^カ内^カ通^カと^カ書^カ如^カ二十^カ年^カを^カか^カれ^カた^カ事^カに^カは^カる^カ物^カも^カ多^カく^カあ^カり^カと^カ文^カ匠^カの^カ事^カの^カ可^カと^カ平^カ

障^カへ^カ瀾^カ之^カ水^カ如^カ吟^カや^カ村^カ之^カ室^カを^カれ 左色和笑 燕石

松^カ永^カ堂^カと^カ右^カ人^カ有^カ如^カ思^カ縁^カを^カり^カ

何^カれ^カあ^カう^カ様^カ自^カ筆^カ中^カり^カと^カら^カに^カま^カり^カて

石^カ草^カや^カ今^カも^カと^カ守^カり^カ 蘇^カ東^カ江^カ守^カ 合

陀^カ遠^カ忌^カ

如^カ人^カ知^カる^カ身^カや^カ手^カ指^カ法^カを^カし^カる^カ何^カも 三三三店 且^カ菓^カ

亦^カ洋^カ元^カ獨^カの^カ分^カ何^カ有^カ不^カ紀

子^カの^カ事^カと^カ院^カ新^カ也^カ正^カ村^カ一^カ色^カ 乞^カ作^カ菴 雪^カ瓶

如^カ下^カ之^カ事^カと^カ日^カ 難^カ耶^カ為^カ 今

支^カ流^カや^カ水^カ上^カた^カり^カ村^カ之^カ名^カ 虎^カ竹^カ一^カ 厚^カ之^カ

如^カに^カを^カり^カと^カ有^カの^カ紙^カ之^カ書^カ 素^カ秀^カ

即^カ也^カん^カ人^カ我^カ佛^カ也^カや^カ雪^カ河^カ 西^カ鳩^カ

金^カ石^カ多^カく^カと^カ是^カ日^カと^カ様^カ十^カ段^カ外^カ 左^カ海^カ

水^カ少^カや^カ去^カと^カと^カを^カ建^カえ^カ法^カの^カ名^カ 鴨^カ嘴^カ

物^カ如^カ多^カく^カあ^カり^カと^カ書^カに^カは^カる^カ 吳^カ弁^カ

子^カ人^カ如^カ少^カや^カ雪^カ乃^カ也^カ一^カ物^カ 梅^カ弁^カ

門^カ一^カ身^カに^カ也^カ如^カ形^カ見^カや^カと^カと^カ書^カ 其^カ菊^カ

何^カれ^カ如^カ其^カの^カ書^カと^カと^カ字^カ之^カ也^カ 松^カ菊^カ

松菊

十

伊勢

去るより其半とて思ふとくくもくもく
かき送 適はを思ふわあかありか教あふふ
青くくあり海身に想 出たれ 可尔

秋の夕の霞の中を思ふの志はあをし
悴しきあまを春と願ふ志はあをし 今

船翁の志存の白を思ふ

そくあふくも思ふはあふくも 存之
くも思ふあふくも思ふあふくも 如翁

史所つ送言

世に暗く被るを思ふはあふくも 柏枝
あふくも思ふあふくも思ふあふくも 小仙

くくくくくくくくくくくくくくくくく
穠雅もくくくくくくくくくくくく 雨柳

史所つ送言

管入は水成に思ふ 皇曆外 應和
年の去るは思ふはあふくも思ふあふくも 糺

史所つ送言

年去るは思ふはあふくも思ふあふくも 侃口
年去るは思ふはあふくも思ふあふくも 糺
村去るは思ふはあふくも思ふあふくも 糺

春年次

十一

歌僊

くは遠きと重なる

各央

くは遠きと重なる

石ころりあさし初霜乃降 精碎

くは遠きと重なる 流枕

くは遠きと重なる 秀砂

月影を流し入るは小仙

くは遠きと重なる 侃口

くは遠きと重なる 雨折

くは遠きと重なる 萬始

くは遠きと重なる 碎

有智とを好む人 殊俗 弱相 夫

善い少 居坐れをま 由るに 竹

士卒の癖の所をま 口 枕

物に利も多し 口 枕

能の所産は 仙 口

あつそと守る心 始 口

小 口 枕

くは遠きと重なる 口 枕

くは遠きと重なる 口 枕

福引乃場 口 枕

今 口 枕

割 社家とたゞく 物 流
 後 社男も菅家の流とあり
 善月忠喜酒と名之流
 山 沢若きく 産 野の地とあり
 座 敷佐藤を流社家負
 小 座 敷佐藤を流社家負
 佐 佐と初め成り流社家負
 依 依に流しぬ 寒 菊乃流
 彦 彦と國 國者ひり流社家負
 為 為と流しぬ 寒 菊乃流
 柳 柳と流しぬ 寒 菊乃流

岩かゝ流しぬ 寒 菊乃流
 始 始と流しぬ 寒 菊乃流
 女 女は上元とあり流社家負
 央 藝乃て 左 左軍抱りあり
 華 去々々流しぬ 寒 菊乃流
 横 横と流しぬ 寒 菊乃流
 合 合と流しぬ 寒 菊乃流
 岸 岸と流しぬ 寒 菊乃流
 舟 舟と流しぬ 寒 菊乃流
 舟 舟と流しぬ 寒 菊乃流

春部

山に花をばさや君のふたはの枝 老嘆翁 貞徳
君の代を皇太子の御不砂糖より 集木軒 鷹馬
増れたる目出の可貴の老花者 昨木
横と横り田子の川をのさ敷し 吉渡壺 横船
日西に渡ると周遊の時をさより紀の事を 中野
事はうらた肥え中を心をとのり 久央
我の手にあつた時にお母のうらをわすれ 中野
三無のこころをわすれしう年経ては其事とていふ 中野
まゝに流しと射と込 破魔糸 全
風は神年をさへゆく柳が都 中野 竜齒

我の事多しとて一尾をたひて
皇太子の御不砂糖より
まゝに流しと射と込 作山
雨高

前年の略次
備唯は額やとふ方に赤白 元日坊 暮夜
存しちや知りたはゆゑに古調子 厚之
若くはらぐは虚言おとすは子 名瓶
ちりりめ一子に射よ小原 夕象
お給や也無海は心門脩 芍水
子所へもやうの事は七枚飾 彈風
武園より月をさへ 信 象度

ハッ等あり七の版より突火おと
 宝華も娘の光や初日ひけ
 五和と流るるやと物の日おほ
 から知れんけなをけり中代のみ
 海が妻子供子の少座と小ねれ
 若由やな江の海母お老れ
 鶴おふ浦赤まきく煙せり
 さ浪の初日けまき孔雀門
 大後と改りて東宮をた人

木鶏
 鳥雀
 草雪
 且水
 古邑
 口昌
 栲藪
 汀鱗
 冬典
 一耕

吉野外中も白れと忘なみ
 本法保徳電百系假名証明者
 たるまらき袋なとと錦加那
 行と義のそは苗代や老後と
 後代をよひ辨れ勿ふ慈心なるとり世をほとめし
 人多く中は徳とそ有る教を所徳とせり
 かしとふは徳の人の徳の例と先は徳と道は道
 群厚とを膚徳ととそ一紙は徳
 見州ととやれ鳥くの心あり
 まり玉はととやれ鳥くの心あり
 富平日紙懐けり星はとと成

昭之
 了扇
 文錦
 暮石
 京
 百合
 左
 三市

善書と伝傳の各ありて文存あり

相とて移りてしき年

連輝淡泊原とて移りてしき年

初愛や田中香具橋は本を戻す

非はや内外今移りて 莫しとて

何とて移りてしき年

雨落はとて移りてしき年

少くは松花とて移りてしき年

海とて移りてしき年

流上は言とて移りてしき年

海舟行

三

舟と神海はとて移りてしき年

まゝの舟はとて移りてしき年

唐虞とて移りてしき年

戸乃とて移りてしき年

志の舟とて移りてしき年

何とて移りてしき年

無常

中とて移りてしき年

衆向とて移りてしき年

六

六

仙傳

其六

身もなきに虫けぢ 少あふ 成合
かけ網のし海草や海草の五双倍 松嵐
變相ともいや冠の多し 桂瀬
菴の意 志子にや 正の山 鹿野

拾珍

月空にゆとを空に海草の中 友物
ほくえに向ふ時と事初 花鬼
ふ解ちつたふのほ色加減 松水
小老門前 日月邊と云 詩の對は
望東山門の早し 初日 冬共

奇仙面

僧徒交の意曲 忘れゆく 好の好 仙傳

万葉をいふ 面月 古鏡 楚士
けしう 好 日け 鏡 志 岳 洞 口
萬を 振り 一 勢の け くら 巴 産
将 先 輝 多 け 山 け 鏡 鹿 松 崎
小 鹿 け け け け 月 け 鏡 鹿 崎
鹿 更 け け け け 鹿 崎

つるさる

霧の氷海 雪ふり 春 鹿 崎 冬 共
一 家 以 鹿 崎 鹿 崎 鹿 崎 鹿 崎 鹿 崎

樹有少所とがさ名獨法芽分 雨折
巖石と樹にうらぬ巖加坪 梅島

猿鶴 わがくづり塔の海と音は
さきくちとくちとくち

年とあふ内色う妙とと藤の控 冬央
奇まらまゆて終まき芽糸外 梅永

田と昌も彩色とたか久んけ花 侃口

能書まるとまを以似り土茶 生島

家庭に二季つとゆら葉か那 梅嶺

南ふた様は流り

襟の肩はくはらひまを色に老あ 龜舟

杉我やとれまう片おな 梅原 所上庵

根や万里世も千を也在後 梅笑 アツク

中もあし早やつとまもまの死 今

今屋の紅猿も手はも藤花也 若後

菅の三た青若さまふ藤お哉 柏枝

梅

種も若むめ乃白しや何れ衣 長原 根梅

歌更春堂あま子二回り終ふ

中存ひく寔は有たり 長梅 兼流下

鳥を古るあに花は 梅 長梅

下巻

日や雲の碇くま 嘉梅の花盛 下巻 巴雨堂

口紅はさけ 紅梅は花散かれ 嘉梅

五糸子納世白の月

世乃早より 磨子 下巻 嘉石

左

ふゆ乃 雪回の鶴や 正一位 三支 阿文

寫

うきしよや 与上 一 菴社杖 弓尔

若紅丁 多つきて され 若の雪 大山 若忠

強紅と 注はて 注り 大山 己千

若紅く 一 若紅 一 若紅 一 若紅 若紅

若紅く 一 若紅 一 若紅 一 若紅

若紅く 一 若紅 一 若紅 一 若紅 若紅

若紅く 一 若紅 一 若紅 一 若紅 若紅

若紅く 一 若紅 一 若紅 一 若紅 若紅

若紅く 一 若紅 一 若紅 一 若紅

若紅く 一 若紅 一 若紅 一 若紅 若紅

若紅

若紅

江崎

霞

少きう河也海に流るる 芽

隅田河也

半とらんをどけり川流 ちん

とん

やまうやあまの縁の河 曇

るわにわをに降や然々 松吟

信るゆらうに海をうまき 朝山

猶月と隠者の見くもの面 狂直

知母院の鏡身てあま指れ 長物

都因をすくくくくくくく 壬辰

清きくくくくくくくくく 之又

花のくくくくくくくくく 羊丸

及移れあましくくくくくく 前始

情の音に移るき。女の剣、子 産

柳

石将の流川志をく柳く邪 厚足

春の紅をたをくくくくく 柳丸

夢は運ふ雀花に子鞠哉 小仙

心何れや柳ふ舞あくる紅約 春和

暖澤とら〜ありや柳〜水 氣

中村洞水子慈天追悼

月あゆ〜柳衣の如く靡る乳 若父

身まよ〜目も死國に引く心 一葉

ま〜持れ作とら〜 似る亦 山

人麻呂千歳御忌

信仲は書に大元の如し 隆平より四々々名有り
<sub>此を大原の皇子乃詩賦と傳しとて御年御
<sub>歌ふ所也人麻呂元生高き此所の持心と云ふ
<sub>古くは阿彌木村也再之吾祖の風俗と身も
<sub>此れは後又云是村阿彌と云ひ大元
_{ま〜とら〜所とら〜とら〜に〜}</sub></sub></sub></sub>

正一位神天大明神と作る也千歳御忌は風俗の如し

遊も色あ〜名と云ふ事也

遊想社命とわ〜や打れあ〜元 冬三

子〜成〜え〜と〜 似〜や〜 冬三

赤久千歳御忌

赤久千歳の名傳を御忌とす郡赤村也之由赤久
<sub>と人元乃乃たはせん年か〜と〜と人あ〜と中
<sub>と〜と望〜と〜と〜と三赤西公福子知事と
<sub>赤久千歳赤久志を子向〜と赤久の里人〜
_{赤久ひけ〜と赤久上園長 依加〜物持〜と赤久と傳}</sub></sub></sub>

何〜とら〜思〜と〜 赤久 柳〜 冬三

温水〜と〜と〜 柳〜 冬三

何〜とら〜秘事〜と〜と〜 赤水

孫家

全 在之能く

此の所に在る種の子は

すくなく 庭に種を

入るよ乃其色と筆に

全

いふたを子と作く柳

皇を子と教え

りてく中 種と

蛙

あつたや若の目か

十一

蛙と三畧やその四民用テ是

安樂也と云ふ

此の首代 諸君

たてしとや

南代小

約た

出代や

温船

三月三日

門守

より

冬

冬

冬

大

大

之

之

之

之

之

之

梅李不言

梅李不言

白ふきざりへ

吟のほ又やあざけり梅枝

今

ふりて目もなほりけのまふ所

上色 嘉少

春子望まぬおふとあまやそはむ

茶 隆情

海舟浪たのや汐の舟乃舟

和秀

今月や潮の景の

後殿 常 繁行

花甘梅

短冊や花の一ふに咲とあり

安住 友意

ちね花の吹紙へ飛胡蝶

桂 桂辞

情懐中をぬえりも梅の親仁

層 胡叟

花角を以て候とけ

新仙アリ

腰のりて親小きあや家おむ

柏枝

性たぬふに船歌水舟

冬 冬

うねるに十二下をく堂と光

今

梅影

古き舟中をり梅と春よ新花

扇河

白ふいびくや梅の身野山

景 景

新成櫻花

体うねりゆりしはや春夜

冬 冬

湯あくるや湯あそぬ道花乃香

立和

梅影

七三

盲人裨長尾へとく歌

多しり 岐を油やまきの社 飢哉

ちりが歌に流るり下河原 久央

五月一日午句油片藤抄

年とつえに老の河ゆさ日比屋 今

下戸とふ化物も有む屋 親受

白雲とくり香炉也くろく零山 木阿

蒲原ゆめ

林檎うく富士まご片一初松 志産

青海の空約約や 糸所ゆり 侃口

族抄

いふ所の者れとて歌やさく將 英胤

蝶はくはくは成ゆはく和 冬央

松陽を三巻

海利とく上 其の指小

ちんを馬とて年立んや山松 宇林

さし雷はさるり何く耳 冬央

石をとてや少く山所をく 松翁

馬をく見む星を流る極心 似哉

古くを能はく

雪たつて入て人々 糸松 冬央

天竺

冬

秋陽堂

秋陽堂は風雅をこころのそとて城南北海と云
こころのそとて人知れぬあまのこころ正風を
作教をえりてこころの明心居士の望み細信路乃
連飲皆時世にそとの白下七五のよき道徳を
そ佳例と翻弄しや

切りにて走るれと七海がり 晴燕

挑燈おれ晴を腕夜 冬兵

今時 秋陽堂の句に
あけくわそし 作らば

冬雪のそとてそとてそとて 冬兵

冬雪のそとてそとてそとて

美にそとて 柳はほろやそとて 冬兵

柳のそとてそとてそとて 柳はほろやそとて 冬兵

今時接抄 冬雪のそとてそとて

持料の製はく白くそとてそとて 冬兵

よのちそとてそとてそとて 冬兵

賑那 蘇に柳のそとてそとて 冬兵

三月也

押越に加勝とたそとそとそと 冬兵
竹のそとそとそとそとそと 冬兵

東洋文

北五

夏之部

綿わたみ序に
馬をくし
家と又
文衣
光也

猛るぬ
今

うき
之又

似を
海木

弁華 そのまはらけ中の部をいふ

うねむら 花の外感うねむら 比喩

弁の 花の 動く一重垣 アタ 万喜

うねむら 花の外感うねむら 青と嵐 ハル 弓尔

うねむら 花の外感うねむら 著尾の ハル 侃口

馬がくし

馬がくし 花の外感うねむら 芭蕉

杜若

拍掌 花の外感うねむら 杜若

杜若 花の外感うねむら 車部

夏之部

廿六

若乃為其在安... 任其之... 和
... 生和
... 生
... 養
... 養

郭云

道の城をくらりと... 養
... 養

一... 郭云
... 規
... 規

鶯に花^{ツグ}戀やうらむ思^{ツグ}帰鳥 口志
園に舟^{ツグ}て自^{ツグ}啼^{ツグ}聲^{ツグ} 蜀^{ツグ}魂^{ツグ} 松^{ツグ}石^{ツグ}

唯^{ツグ}く松^{ツグ}石^{ツグ}の^{ツグ}排^{ツグ}を^{ツグ}と^{ツグ}す^{ツグ}は^{ツグ}老^{ツグ}賢^{ツグ}色^{ツグ}僧^{ツグ}
雨^{ツグ}を^{ツグ}と^{ツグ}し^{ツグ}は^{ツグ}秋^{ツグ}を^{ツグ}と^{ツグ}し^{ツグ}は^{ツグ}蜀^{ツグ}魄^{ツグ} 行^{ツグ}雙^{ツグ}

と^{ツグ}は^{ツグ}空^{ツグ}の^{ツグ}下^{ツグ}に^{ツグ}美^{ツグ}哉^{ツグ}か^{ツグ}思^{ツグ} 冬^{ツグ}共^{ツグ}
お^{ツグ}り^{ツグ}し^{ツグ}て^{ツグ}一^{ツグ}番^{ツグ}待^{ツグ}た^{ツグ} 時^{ツグ}鳥^{ツグ} 鳥^{ツグ}石^{ツグ}

松^{ツグ}石^{ツグ}や^{ツグ}雪^{ツグ}に^{ツグ}さ^{ツグ}る^{ツグ} 杜^{ツグ}鵲^{ツグ} ^上石^{ツグ} 燕^{ツグ}石^{ツグ}
ほ^{ツグ}の^{ツグ}字^{ツグ}も^{ツグ}さ^{ツグ}る^{ツグ} 松^{ツグ}石^{ツグ}

ほ^{ツグ}の^{ツグ}字^{ツグ}も^{ツグ}さ^{ツグ}る^{ツグ} 松^{ツグ}石^{ツグ} 松^{ツグ}石^{ツグ} 松^{ツグ}石^{ツグ}
松^{ツグ}石^{ツグ} 松^{ツグ}石^{ツグ} 松^{ツグ}石^{ツグ} 松^{ツグ}石^{ツグ}

何^{ツグ}と^{ツグ}も^{ツグ}さ^{ツグ}る^{ツグ} 松^{ツグ}石^{ツグ} 松^{ツグ}石^{ツグ}
松^{ツグ}石^{ツグ} 松^{ツグ}石^{ツグ} 松^{ツグ}石^{ツグ} 松^{ツグ}石^{ツグ}

螢

戸^{ツグ}を^{ツグ}た^{ツグ}く^{ツグ} 螢^{ツグ}者^{ツグ}の^{ツグ} 松^{ツグ}石^{ツグ} 松^{ツグ}石^{ツグ}
湯^{ツグ}の^{ツグ} 松^{ツグ}石^{ツグ} 松^{ツグ}石^{ツグ} 松^{ツグ}石^{ツグ}
松^{ツグ}石^{ツグ} 松^{ツグ}石^{ツグ} 松^{ツグ}石^{ツグ} 松^{ツグ}石^{ツグ}

如生

頼政流墓に花芽のむき
相く、折弁寒く、桐花を
其通
去新や里八坪の女鳥
嘉吟
下色

五月五日

春平紅風を産きると紙織
白翠
早し女はさくく、花の心
白河
立和
下色

江紙音聴
奥行の余興

遠目の中、葉の字と、
まご、あを、外よ、
冬央

小野の驛と知長に
あや

あやを、
柏枝
や、
冬央

空を、
冬央

竹葉の眉を、
冬央
左

如生

如生

竹の葉

園

竹の葉は法用ふたして 志はれ 一壁

桂抄

ゆりありし 此の種子種を寄る 弓矢

北海は布を種し 温床 冬虫

一とて此の風の姿や 志良園 石板

予う後後と砂京三里間のまをたら

かく声に 肥と 志良園 志良園

別とての 天坑 足はかや 特何舟 禰月

中々

の日向や 影は黒くく 年の色 是抄

中々や 竹の影は 杖の山 南尚

夕ならの中におかたや 羊元 松吟

海の色を 竹の影は 志良園 桂抄

是葉子追悼 海の色を 竹の影は 志良園

この竹の影は 竹の影は 志良園

深き竹の影は 竹の影は 志良園

かきつゝも 竹の影は 志良園

温解 竹の影は 志良園

竹の影は 竹の影は 志良園

竹の影は 竹の影は 志良園

竹の影は 竹の影は 志良園

西の山の中

知少見人柳小幡の長花散平池村傍 即中

涼風解は風骨と葉庵 冬実

水打はは白紙屋し平池村 竹窟

納涼

立文目うたふ涼し 日傘 木阿

舟長を海さ日多の川 冬実

在渡景社の新橋ゆ帆

かたねとたふ涼涼を涼舟 今

と船目川雪の涼に冷れを 南阿

少別忍房中を遊る夕日平池村 竹窟

涼しと花散見をけりかたねあり 昔侍

清し山や始く水と流る西行 三平

石所

石井の池に半花散ひ世 羅儀

石竹小竹の影の流るる那 冬実

山に井古水不流る水出那 河石

菅草に結ん人足及流る那 馬六

堂女は舞夕か乃山りう那 梅牛

夕くらの兒を垣根や糸世鳴海 龜世

有月照反^反為^為る^るも^も秋^秋林^林し
 横船
 早^早と^と水^水を^を下^下ゆ^ゆく^く川^川社
 陣氣
 修^修進^進深^深に^に振^振る^る洗^洗じ^じ川^川岸^岸乃^乃ち
 古^古矣^矣
 有^有る^る連^連舟^舟舟^舟古^古び^びと^とく^くに^に卷^卷る^る乃^乃ち
 横^横橋^橋高^高古^古矣^矣

秋之部

有^有る^るし^しや^や水^水不^不濁^濁ん^んと^と秋^秋
 大^大垣^垣 木^木因^因
 二^二の^の月^月や^や矢^矢洞^洞に^に橋^橋を^を所^所相^相手^手
 京^京 狭^狭口^口
 山^山の^の身^身久^久連^連の^の実^実は^は白^白果^果の^の穴^穴
 古^古矣^矣
 秋^秋白^白し^しと^とふ^ふと^とを^を約^約に^に伴^伴由^由入^入
 後^後文^文

秋^秋風^風如^如方^方行^行先^先て^て春^春を^を念^念に^に計^計す^す
 秋^秋風^風如^如方^方行^行先^先て^て春^春を^を念^念に^に計^計す^す
 秋^秋風^風如^如方^方行^行先^先て^て春^春を^を念^念に^に計^計す^す
 秋^秋風^風如^如方^方行^行先^先て^て春^春を^を念^念に^に計^計す^す

七夕

七夕^{七夕}に^にお^おも^もふ^ふ早^早ま^ま入^入け^けり^りと^と言^言ふ^ふ
 村^村民^民
 夕^夕に^にお^おも^もふ^ふ早^早ま^ま入^入け^けり^りと^と言^言ふ^ふ
 如^如石^石
 夕^夕に^にお^おも^もふ^ふ早^早ま^ま入^入け^けり^りと^と言^言ふ^ふ
 是^是葉^葉
 夕^夕に^にお^おも^もふ^ふ早^早ま^ま入^入け^けり^りと^と言^言ふ^ふ
 之^之又^又
 夕^夕に^にお^おも^もふ^ふ早^早ま^ま入^入け^けり^りと^と言^言ふ^ふ
 柏^柏枝^枝
 夕^夕に^にお^おも^もふ^ふ早^早ま^ま入^入け^けり^りと^と言^言ふ^ふ
 古^古矣^矣
 七夕^{七夕}に^にお^おも^もふ^ふ早^早ま^ま入^入け^けり^りと^と言^言ふ^ふ
 俄^俄雨^雨 左

益

ひとあそびなりしとあはれ切花が菊 楳舟

手拍子を打て無くも又彌那 弓矢

ふせと中の此共秋なりをむ

紅い守花も空の又進歩月 下進 吉次

身代と芝園あそびおとらふ家 冬庚

津妙と衣とりし 秋紅白 岩村住 敷水

秋野

ふせとくちかたすとも音の夕外 坂陽 冬曆

あつとくちかたすとも音の夕外 冬曆

楳舟

切花とくちかたすとも音の夕外 白文

竹つけとくちかたすとも音の夕外 大楳

信濃 古歌

雪さしりぬ吸細り草花を 冬庚

鳥丸資交仰七首新巻の内

向江江の丸ふふた拍このの氣 左

霜とくちかたすとも音の夕外 雲帆

秋風とくちかたすとも音の夕外 秋野

あつとくちかたすとも音の夕外 白鳥座

山雀に梅を

山雀に梅を... 老矣
たつと鳥を... 老矣

央孫母長傳

土うわの... 養蚕

右上北替と評す

揚... 冬央

渡鳥... 後

危... 積石

長... 河石

了... 遊月

山雀に梅を... 池田氏

故... 松風

名... 松吟

枯... 燕石

稀... 芽草

雁... 大坂

乃... 舍羅

雲... 麻河

揚... 安信

素... 來堂

春

三

古の都に内はし申かりゆり世
冬央
己の事く神の事秘傳の規
筆

くはくはと厚く秘傳田面がれ
西折

月

実 実や空の月と落し尻
染

乃と人との抱くま夜珠の頭
其角

片月や編笠を巻居にのりけ
三徑

海月水より馬丸く身を取
古後堂

山と空の空を流す月が田子
飛竹

田
従は江の月ま月まの八雲を巻
不空

空を飛ぶ鳥に如き空の中を
去る

武蔵守は我家不仕る月余
水月

波の紋纏まらりしかり月足
桂餅

十六夜と見難と思ふと
冬央

千の雲水感とよら月の光加那
左

不空を巻かけは空の結も
左

月より白く生れしは
小仙

名月や空を成り控をほす
礫石

乃と人との抱くま夜珠の頭
燕石

三十五

三十五

石月屋板敷の如瓶子取 左

をそのりねて後也

清の濁れ月、移さふおる月 福嶋 得参

金糸の竹をたのしむ道実 左 任流

橙とみらんこたふをかたあ 冬典

家室も葉を落しとらんおのりておれん

清の如く有明ふ移れ家如新 日景

上のおとろし

世はくろくち月のお 柏原 江水

芋の味も思ふ海 左 冬典

さくらんぼとん移事か 冬典

送まふに首目や 冬典

冬乃雨に合舞を 冬典

雨の如く 冬典

十の如く 冬典

情 冬典

冬 冬典

い 冬典

冬月 冬典

ついでに潮石を月化カハヒ龍珠

古酒の堂に侍り新さけ 省典

全時

若くは焼灰中へ推し手廻す 全

礎

満ちてを色とり一筋をさめず 流枕

強いの音も形も流石に 柏カ芝シ

央師母産長牌

江りききうあきあきや物懸し 水塵ミヅチ

石投げ流石に流石カ流石カ

群居を互層にたもたす 高松

障子り中を物よ月影 史略

露 入菴くち

空を渡るも流石にたもたす 嵐雪アヲユキ

屋だ先母草のちねえや流石 燕石ツバメイシ

月は宵やこらもえ流石にたもたす 松吟マツカ

精酔兄追悼 電光石火の商人のたふすり別不
此は二杯の酔を能く分る者と推す

病の先之文幅のちりり 彦太

いづれも中と流石にたもたす 志和

推挙

世々かきし里に在りて藤紅戸中津川 九氣

氣しとくおとく白河新酒 冬冬

鹿は音や里に大根おろすと 其考

菊

年々よりそきて美濃川河内 未山信守考

岩折りて子おろけり菊の丸たに 安信

先皇考好と好てひて

弟おろの海に舟や長渡信列 修琴

形と満くも序とくも月 冬冬

茅よりと菊香る人おろけり本橋 藤田

文通

上高年と云ふは元祿の東に在りて

作作 惜もらるや萬事も世中を 千流

とく在病血と血と洗ふ猶自亦 応和

柳傳にとく成と経ぬ千 冬冬 冬冬

若きもや冬と清の菊とを 侃口

兼は酒とや冬と雪の流は口 小仙

とく柳中初 花初 菊初 烟初 羅拿南 麟形

形と并もは紫とくは菊香る花 麟形

一子と若りて人の心とをえ

一場の兼盗人や 無量佛 芝骨柏原

燕石子切子並抄

洞より粒菊と鳥居の拍子
重石は石のわらわさくは痛
小胃麻をん中しは善は自は
左 左 左 左 左 左 左 左

後月

後月 後月 後月 後月 後月
後月 後月 後月 後月 後月
後月 後月 後月 後月 後月
後月 後月 後月 後月 後月

紅葉

紅葉 紅葉 紅葉 紅葉 紅葉
紅葉 紅葉 紅葉 紅葉 紅葉
紅葉 紅葉 紅葉 紅葉 紅葉
紅葉 紅葉 紅葉 紅葉 紅葉

冬部

冬部 冬部 冬部 冬部 冬部
冬部 冬部 冬部 冬部 冬部
冬部 冬部 冬部 冬部 冬部
冬部 冬部 冬部 冬部 冬部

かたむき山仙とんぼん

志月一老と田左任庵や山仙也 瓶哉

そがれや春名盤に原の二口歩 壺堂

本枯や吹強はれあけ春 赤和

十月乃中平しし子重成

仙遊しつゆさうし春好意感 久実

八松平 侍の次郎 枯尾也 如行

時田

汗火とく兼に化さぬ 時田 松星

雨月とく兼に化さぬ 日中 橋 芸

紅の紅面ととれとれ志重也 煙景

師紅紅は定観中流系又志重 冬典

子乃兼し時田 花紅とく 白星

つら清紅紅と 時雨 芽草

時田とく かに集々 志重也 之又

相とれ兼し 重也 志重也 一也

池紅也とく 志重也 中津鼓 二泉

院時田の 志重也 志重也

片能名乃ノ、一字五人ノ 志重也 雲瓶

志重也とく 志重也 志重也 扇河

初懸

大いとしとたや内裏は初り
此もや先ひやだりよの録
丸もやうめやをり乃の鏡
軍と唐一長也の傳をた
君と信陶の討射や少也鶴

智はたふりて思ぬの初作
連城は玉や千和の梅鳥
思葉
冬実
無和

くろはたふりて思ぬの初作
立而るる見と客ぬくめ
立葉

燒飯は二文傳とて
霜

本は乃をの一下傳とて
口
子

漢書

四

今時

石文入 廣新 水地 龍 煖 甫 外 養

桂砂

砂 紅 膏 土 赤 京 赤 土 赤 膏 友 玉

中 海 氣 を 料 程 扱 ち 紅 土 赤 赤 実

火 燭

石 文 入 中 海 氣 赤 土 赤 膏 赤 膏 赤 膏

赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏

赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏

赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏

炭 紅 土 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏
燭 紅 土 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏
燭 紅 土 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏
燭 紅 土 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏

赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏

赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏

トウ 紅 土 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏
阿 紅 土 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏
中 紅 土 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏
日 紅 土 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏
赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏

赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏

赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏 赤 膏

右渡堂息行

古くは中へ	熱帯	下	岸と運	横船
を	く	く	た	た
後	の	背	海	の
昔	に	競	り	し
存	り	た	り	し
門	序	留	松	橋
鱗	光	葵	圭	

謝 僧木端印右刻勝

一壁晴窓西子に光解より 春居在肉に信ふ予に言
 半痛く事ありしはれ たりふれり 子刻勝なり
 不れは初めはふふ 不別を解より 事ふふなり
 印しん 年しん 年ぬ

左時 紅糸の印と銘也
 新 作 した 紅 糸 と 銘 也
 冬 央

あまの紅糸を尋らば 紅糸の印と銘也
 冬央

雪

濃列非津光 あり桂好

月と日とありありと云はれ 本歌

朱の色の白く對し丸

降出所を朱の魚も雲の如く 桂好

後好書と云はれ海心は舟外 左

おの雪を筆先たたく葉外 送声

雪は。松や外山はとて 送声

髪置

千代紅雲がびく芽所 庭の砂 桂好

本編よりけえぬはく 送声

大雪や兒手拍も 一ねと夕 流枕

桂好はてと云はれと云

之の雪は味うかきやと 送声 乳子

ふた押も思水のそ 月 冬果

かゝ桂子と云はれ

踏も雪かきもゆきの首 送声 左

雪のつくはきと桂や 送声 左

丸雪

朝敵とてと云はれ 送声 左

送声 世や百八の雪はれ 送声

後年

を^イ旅^イ部^イや^イ河^イの^イ盟^イと^イ以^イ形^イ 上巻

忠孝

こころを^イし^イ旅^イ部^イと^イ以^イ形^イ 上巻

勢自の年^イ終^イふ^イ河^イに^イ身^イを^イこ^イむ^イ者^イは^イま^イ

ま^イし^イ上^イか^イと^イ 忍^イ者^イを^イ後^イ橋^イの^イ年^イ終^イふ^イ 上巻

旅^イ部^イを^イ終^イふ^イ 上巻

河^イに^イ身^イを^イこ^イむ^イ者^イは^イま^イ 上巻

の^イ年^イ終^イふ^イ 上巻

厄^イ拊^イに^イ北^イ條^イに^イ小^イ池^イに^イ川^イ 上巻

章^イ賦^イ天^イを^イく^イふ^イ 上巻

信^イ快^イと^イ書^イふ^イ 上巻

行^イ年^イ終^イふ^イ 上巻

極^イ老^イの^イ井^イに^イ北^イ條^イに^イ川^イ 上巻

忠孝

濁^イ景^イを^イ白^イに^イ書^イ 上巻

五^イ風^イを^イ終^イふ^イ 上巻

年^イ終^イふ^イ 上巻

年^イ終^イふ^イ 上巻

在^イ風^イを^イ終^イふ^イ 上巻

何^イれ^イ 上巻

後年

四十二

とらちと浮世のせんやうに波
おひらきそとにけりふも
うけのそ面にたけ世房のれ
掛くと秘件ありや障子紙
浦の台屋をそまきしとあり
しらむや本北下園の
半ありけり秤ふけり札網
く昨気ぬやうの志は所
身はまの未持いと破りる者

久兵衛
如月
橋在
風笛
全
百子
風子
壽
桂

